

随想

リーダーを選ぶ

能力開発工学センター評議員 奥田健二



EU（欧州連合）が発足して11年、EC（欧州共同体）からEUへと成功裏に発展してきた歴史の跡を追うがごとく、昨今、東アジア共同体形成の動きが顕著になってきた。停滞社会の象徴とされてきた東アジアの歴史を大きく転換する時点に、今我々は立っていると言えるだろう。

しかしアジア共同体の形成の運動はなお混迷の域を脱し切れていない。地域共同体としての成熟度の点でEUに大きく水をあけられていると言わざるをえないのが現状である。

EUの成功は、経済的に最強であるドイツが仇敵フランスと手を組んで果たしてきたリーダーシップによるところが大きいと言えるだろう。ドイツは第1次大戦中の蛮行について明瞭に謝罪し、ヨーロッパの人々から受け入れられたゆえに、指導力を発揮することができたのだ。これに対して東アジアの場合には、域内の最大経済国である日本がアジアの人々から受け入れられず、指導力を発揮することができなかった。

一つには東アジア共同体形成に日本が指導力を発揮すると、米国のご機嫌を害することになると恐れた政治家たちの躊躇逡巡があつたからと思われるが、日本の指導力発揮を期待したタイ・マレーシア・シンガポールなどの失望を招く結果となった。

しかしより根本的な要因は、靖国神社問題の“とげ”が今なお未解決のまままだという事態にあることは誰でもが認めるところだろう。中国国家主席は“大東亜戦争”開戦を決断した政治指導者。A級戦犯を靖国神社に祀り、日本の総理大臣が礼拝していることに抗議している。この抗議に対して「日本では死んだ人は皆、神として祀られる」と小泉首相は答えていた。この回答は日本人には理解できるかもしれない。だが、小泉氏の回答を聞いた中国そしてアジアの人々はどうとらえるだろうか。「私は戦犯を神として礼拝しています」と公言していると受け取られる危険は避けられないのである。この発言は、たとえてみれば、ドイツ人が「私はヒットラーを神様と思って礼拝しています」と言っているようなものではないか。もしそのような発言をしようものなら、ドイツの政治指導者はヨーロッパの中で誰からも相手にされなくなってしまうだろう。

さすがに日本の経済界のリーダーは、このような事態を見過ごすことができなくなってきたようである。経済同友会の北条代表幹事は「小泉氏には靖国神社参拝は控えてもらいたい」と記者会見で要請した。アジア地域の将来を見据えた視点に立つての、止むに止まれぬ発言だと思われる。

日本がアジア地域内で信頼を得るかどうか、国を代表するものの肩にかかっている。日本を導くリーダーにどういう人を選ぶか、政治家を選んでいるのは他ならぬ我々自身である。政治家たちが日本を誤った方向に導いているとしたら、それはとりも直さず日本国民自身の思想が浅薄であり、歴史への認識が不足していることとして反省されねばならない。

選挙の投票率は下がる一方、社会や政治への無関心が広がっている。社会や政治の問題が、自身の問題であるという教育をし、リーダーの選択に必要な実力を育てたいものである。♠